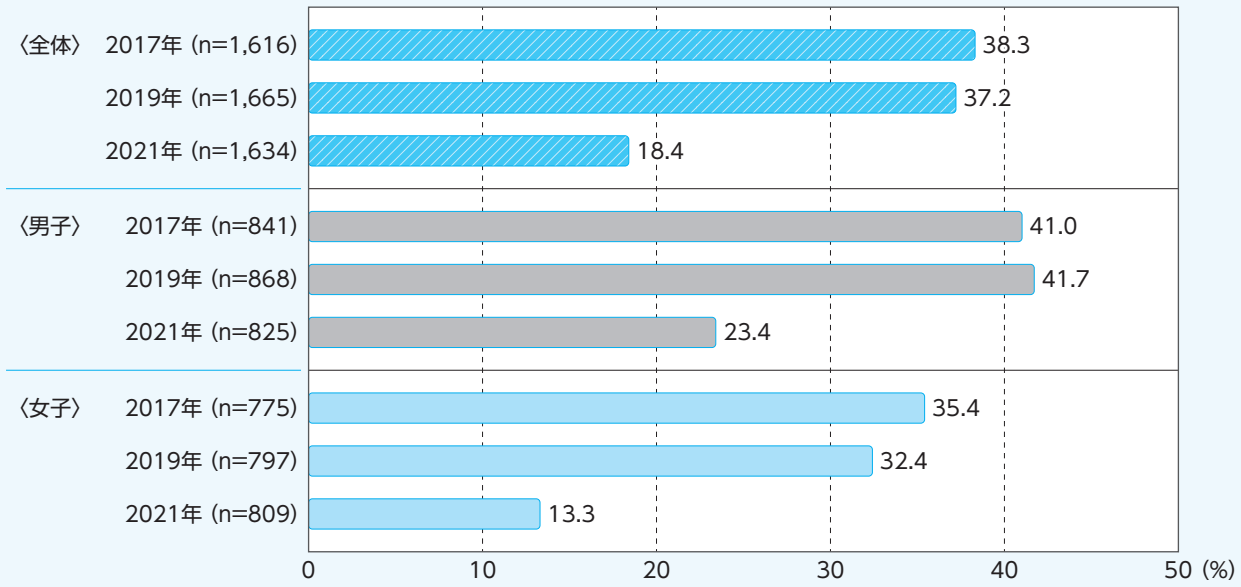
5 スポーツ観戦

5-1 直接スポーツ観戦状況

図5-1に12~21歳の直接スポーツ観戦率の年次推移を示した。過去1年間に体育館・スタジアム等へ足を運んで直接スポーツを観戦した者は、全体の18.4%であり、わが国の12~21歳の青少年の直接スポーツ観戦人口は211万人と推計できる。年次推移をみると、2019年調査の37.2%から18.8ポイント減少した。新型コロナウイルス感染拡大に伴う直接観戦の機会減少が反映された結果と判断される。

性別にみると、男子の観戦率は23.4%、女子は13.3%であり、男子が女子を10.1ポイント上回った。2019年と比較すると、男子は18.3ポイント、女子は19.1ポイントそれぞれ減少した。



【図5-1】直接スポーツ観戦率の年次推移(12~21歳:全体・性別)

資料:笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021

COMMENTS

資料:笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2021、「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021

- プロスポーツ選手と触れ合う機会に積極的に参加しています。コロナ禍で今は難しいですが、早くできる環境に戻ってほしいです。 〔7歳女子の父親〕
- 身体を動かすことがあまり好きではないため、少しでも好きになってもらうために、スポーツ(例えばスキーなど)が上手になれるように、一緒に練習をしたり、教室に通ったりと工夫している。 〔11歳男子の母親〕
- コロナ禍で充分かつ安全な活動が難しいことが悩みです。個別にランニングをしても、マスクを着用していないと注意を受けてしまうのではと心配になり、子どもたち自ら運動中もマスクを着けていてかわいそうに思います。密を避け、夜間に自主練をさせているのが現状ですが、外灯が少ない場所もあり心配な面もあります。 〔15歳男子の母親〕

表5-1に示す学校期別にみると、2021年は中学校期17.8%、高校期20.9%、大学期19.1%、勤労者14.4%であり、高校期の直接観戦率が最も高い。2019年と比較すると、中学校期は17.6ポイント、高校期は20.4ポイント、大学期は20.0ポイント、勤労者は16.5ポイントそれぞれ減少した。

表5-2には、性別・学校期別にみた直接スポーツ観戦率を示した。2021年をみると、男子は中学校期23.0%、高校期26.6%、大学期26.1%であり、高校期の直接観戦率が最も高かった。女子は中学校期12.6%、高校期15.0%、大学期13.0%であり、男子と同様に高校期が最も高かった。男女差をみると女子の中学校期と高校期、大学期の観戦率は男子と比べて10ポイント以上低い。勤労者では男子14.2%、女子14.6%と同程度であった。

2019年と比較すると、男子では中学校期は17.4ポイント、高校期は18.7ポイント、大学期は18.4ポイント、勤労者は20.4ポイントそれぞれ減少した。女子では中学校期は16.9ポイント、高校期は22.1ポイント、大学期は21.2ポイント、勤労者は11.8ポイントそれぞれ減少し、男子の勤労者と女子の高校生、女子の大学生では2019年から直接観戦率が20ポイント以上の減少がみられた。

【表5-1】直接スポーツ観戦率の年次推移（12～21歳：学校期別）

2017年		2019年		2021年	
学校期	%	学校期	%	学校期	%
中学校期（n=536）	39.7	中学校期（n=565）	35.4	中学校期（n=494）	17.8
高校期（n=475）	41.3	高校期（n=506）	41.3	高校期（n=513）	20.9
大学期（n=358）	41.6	大学期（n=363）	39.1	大学期（n=392）	19.1
勤労者（n=205）	25.4	勤労者（n=194）	30.9	勤労者（n=195）	14.4

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

【表5-2】直接スポーツ観戦率の年次推移（12～21歳：性別×学校期別）

男子

2017年		2019年		2021年	
学校期	%	学校期	%	学校期	%
中学校期（n=294）	43.5	中学校期（n=307）	40.4	中学校期（n=248）	23.0
高校期（n=237）	41.8	高校期（n=258）	45.3	高校期（n=259）	26.6
大学期（n=176）	44.9	大学期（n=173）	44.5	大学期（n=184）	26.1
勤労者（n=117）	29.9	勤労者（n=107）	34.6	勤労者（n=113）	14.2

女子

2017年		2019年		2021年	
学校期	%	学校期	%	学校期	%
中学校期（n=242）	35.1	中学校期（n=258）	29.5	中学校期（n=246）	12.6
高校期（n=238）	40.8	高校期（n=248）	37.1	高校期（n=254）	15.0
大学期（n=182）	38.5	大学期（n=190）	34.2	大学期（n=208）	13.0
勤労者（n=88）	19.3	勤労者（n=87）	26.4	勤労者（n=82）	14.6

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

5-2 直接観戦したスポーツ

表5-3に12～21歳の直接観戦したスポーツを示した。全体では「プロ野球（NPB）」の観戦率が5.4%と最も高く、次いで「高校野球」3.5%、「サッカー（高校、大学、JFLなど）」2.6%、「Jリーグ（J1、J2、J3）」2.3%、「バスケットボール（高校、大学、WJBLなど）」1.9%であった。

性別にみると、男女ともに「プロ野球（NPB）」（男子7.5%、女子3.2%）の観戦率が最も高く、次いで「高校野球」（男子4.6%、女子2.3%）であった。以下、男子は「サッカー（高校、大学、JFLなど）」3.8%、「Jリーグ（J1、J2、J3）」3.5%、「プロバスケットボール（Bリーグ）」1.8%が続く。女子では「バスケットボール（高校、大学、WJBLなど）」2.2%、「マラソン・駅伝」2.0%、「サッカー（高校、大学、JFLなど）」「バレーボール（高校、大学、Vリーグなど）」1.4%が続いた。

学校期別にみると、高校期を除いて「プロ野球（NPB）」の観戦率が最も高く、中学校期5.5%、大学期7.1%、勤労者5.1%であった。高校期では「高校野球」と「サッカー（高校、大学、JFLなど）」の観戦率が最も高く、いずれも4.5%であった。

【表5-3】12～21歳の直接観戦したスポーツ（全体・性別・学校期別：複数回答）

(%)

順位	種　目	全体 (n=1,634)	男子 (n=825)	女子 (n=809)	中学校期 (n=494)	高校期 (n=513)	大学期 (n=392)	勤労者 (n=195)
1	プロ野球（NPB）	5.4	7.5	3.2	5.5	4.1	7.1	5.1
2	高校野球	3.5	4.6	2.3	1.6	4.5	5.1	3.1
3	サッカー（高校、大学、JFLなど）	2.6	3.8	1.4	0.6	4.5	3.1	2.1
4	Jリーグ（J1、J2、J3）	2.3	3.5	1.1	2.2	2.7	2.3	2.1
5	バスケットボール（高校、大学、WJBLなど）	1.9	1.6	2.2	1.2	2.7	2.6	0.5
6	バレーボール（高校、大学、Vリーグなど）	1.5	1.7	1.4	0.4	3.1	1.5	0.5
	プロバスケットボール（Bリーグ）	1.5	1.8	1.1	2.0	1.4	0.8	2.1
8	マラソン・駅伝	1.4	0.8	2.0	1.4	1.4	2.0	0.5
9	サッカー日本代表試合（五輪代表を含む）	0.8	1.2	0.4	0.8	0.8	0.8	1.0
10	アマチュア野球（大学、社会人など）	0.7	1.0	0.4	0.0	0.0	2.3	1.0
	直接みたことはない	81.6	76.6	86.7	82.2	79.1	80.9	85.6

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

COMMENTS

資料：笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2021、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

- 親が指導すると厳しくなりがちなので、親の友人や祖父母を含めてスポーツを楽しく始められるようなきっかけ作りをしています。〔6歳女子の母親〕
- 色々と物ごとの道理や仕組みに興味が出てきた時期に新型コロナウイルスの影響でさまざまなことが体験できず、特にスポーツに関しては何もしてやれていない状況です。せめてオリンピックで色々な競技をみて、何かひとつでも興味を持ってくれたらと願っています。〔5歳男子の母親〕
- 幼稚園児の頃から小5までスイミングに通い、小4から自らサッカー少年団に入りたいと入団しましたが、楽しむというより上手な子たちに圧倒されていました。中学の部活は全員入部ということで渋々卓球をしましたが、高校生になり何もしたくないと帰宅部になったので、勝ち負けよりゲーム感覚で楽しめるスポーツがあったら良いと思いました。〔16歳男子の母親〕

5-3 テレビやスマートフォンなどのメディアによるスポーツ観戦状況

図5-2に12~21歳のテレビやスマートフォンなどのメディアによるスポーツ観戦率の年次推移を示した。2021年をみると、過去1年間にテレビやスマートフォンでスポーツの試合を観戦した者は全体の65.0%であり、わが国の12~21歳のテレビやスマートフォンなどによるスポーツ観戦人口は746万人と推計された。

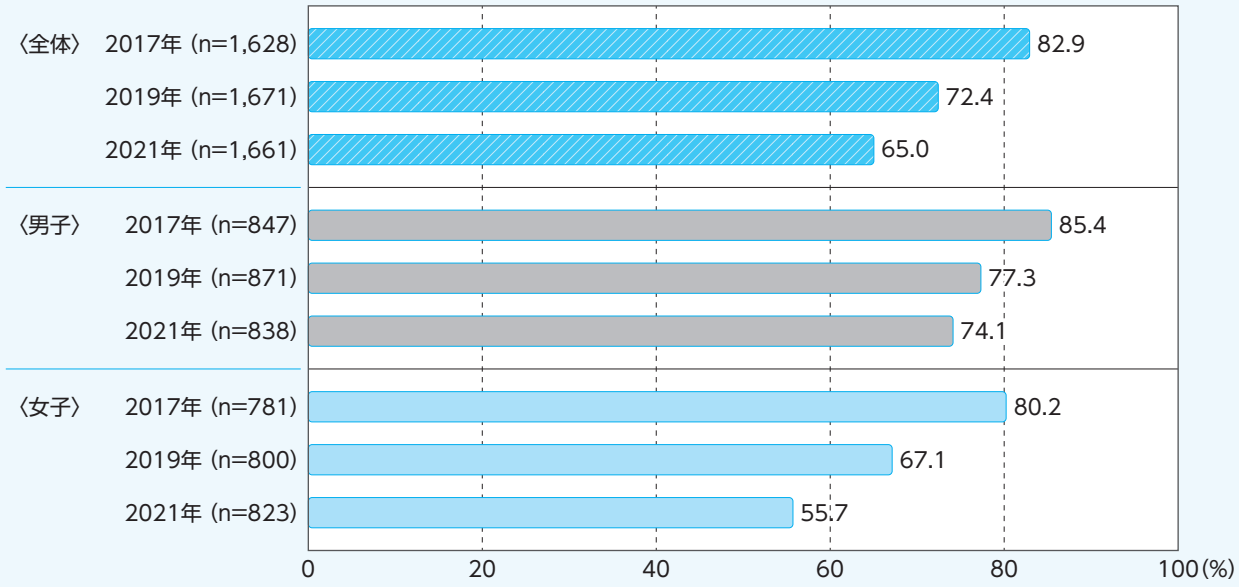
年次推移をみるとメディアによる観戦率は2017年より低下傾向にあり、2017年から2019年にかけては10.5ポイント、2019年から2021年にかけては7.4ポイントそれぞれ減少した。2019年から2021年にかけての観戦率の低下は、新型コロナウイルス感染拡大に伴うスポーツイベントの中止が放映件数の減少につながったことも影響していると考えられる。

性別にみると、メディアによる観戦率は男子74.1%、女子55.7%であり、男子が女子を18.4ポイント上回る。

2017年からの推移をみると、男女ともにメディアによる観戦率は低下傾向にある。2019年と比較すると男子は3.2ポイント、女子は11.4ポイントそれぞれ減少し、特に男子に比べて女子の観戦率の低下が顕著である。

図5-3に示す運動・スポーツ実施レベル別にみると「レベル0」41.6%、「レベル1」58.3%、「レベル2」65.5%、「レベル3」69.9%、「レベル4」85.3%であり、レベルが上がるにつれて観戦率は高くなる。

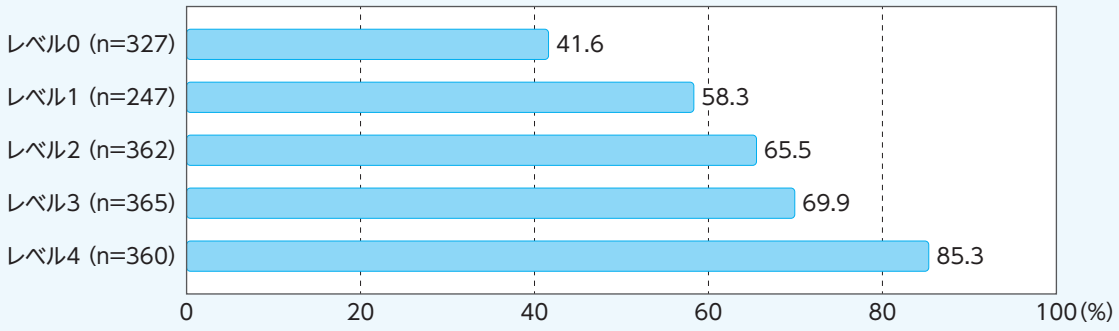
図5-4に示す学校期別にみると、2021年のメディアによるスポーツ観戦率は中学校期66.9%、高校期65.4%、大学期67.9%、勤労者53.6%であった。年次推移をみると2017年からいずれの学校期においてもメディアでの観戦率は減少傾向にある。2019年から2021年にかけては、中学校期では7.5ポイント、高校期では9.6ポイント、大学期では7.7ポイント、勤労者では2.1ポイントそれぞれ減少した。



【図5-2】テレビやスマートフォンなどのメディアによるスポーツ観戦率の年次推移（12~21歳：全体・性別）

注1）2017年はテレビ観戦のみを対象としている
注2）メディア：テレビ・スマートフォン・パソコン・タブレットなどによる視聴を含む

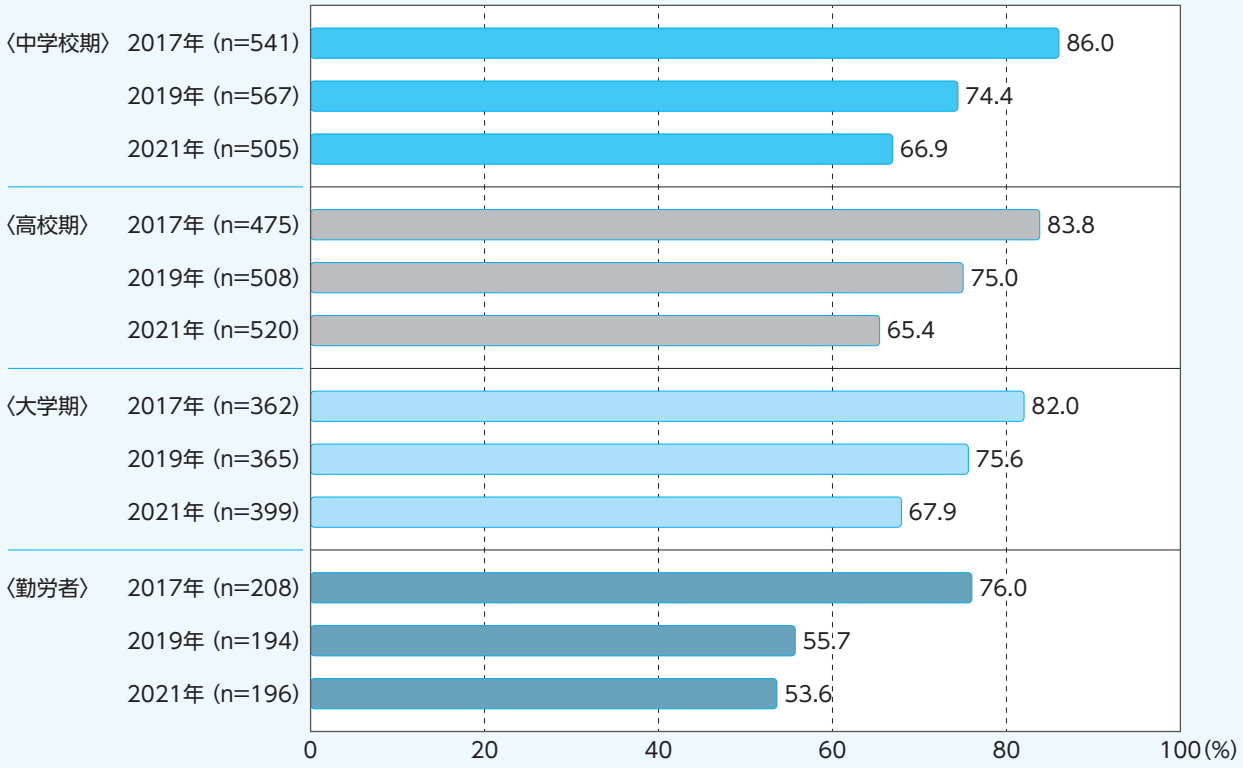
資料：笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021



【図5-3】テレビやスマートフォンなどのメディアによるスポーツ観戦率（12～21歳：レベル別）

注）メディア：テレビ・スマートフォン・パソコン・タブレットなどによる視聴を含む

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021



【図5-4】テレビやスマートフォンなどのメディアによるスポーツ観戦率の年次推移（12～21歳：学校期別）

注1）2017年はテレビ観戦のみを対象としている
注2）メディア：テレビ・スマートフォン・パソコン・タブレットなどによる視聴を含む

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

5-4 テレビやスマートフォンなどのメディアで観戦したスポーツ

表5-4に12～21歳が過去1年間にテレビやスマートフォンなどのメディアで観戦したスポーツを示した。全体では「プロ野球(NPB)」が32.4%と最も高く、次いで「サッカー日本代表試合（五輪代表を含む）」21.4%、「高校野球」20.6%、「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」20.5%、「マラソン・駅伝」14.9%であった。

性別にみると、男子は「プロ野球（NPB）」40.1%が最も高く、次いで「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」30.0%、「サッカー日本代表試合（五輪代表を含む）」28.8%、「高校野球」25.1%、「海外のプロサッカー（ヨーロッパ、南米など）」22.9%となり、野球とサッカーの人気が高い。女子は「プロ野球（NPB）」24.5%が最も高く、次いで「高校野球」16.0%、「マラソン・駅伝」14.3%、「サッカー日本代表試合（五輪代表を含む）」13.9%、「プロテニス」11.2%となり、種目に男女の違いが確認できる。

表5-5には、**表5-4**に示したテレビやスマートフォンなどのメディアによる観戦率が高かった全体の上位5種目

【表5-4】12～21歳のテレビやスマートフォンなどのメディアで観戦したスポーツ（全体・性別：複数回答）

(%)

順位	種　目	全体（n=1,661）	男子（n=838）	女子（n=823）
1	プロ野球（NPB）	32.4	40.1	24.5
2	サッカー日本代表試合（五輪代表を含む）	21.4	28.8	13.9
3	高校野球	20.6	25.1	16.0
4	メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）	20.5	30.0	10.8
5	マラソン・駅伝	14.9	15.5	14.3
6	海外のプロサッカー（ヨーロッパ、南米など）	14.4	22.9	5.7
7	Jリーグ（J1、J2、J3）	13.3	19.9	6.6
8	格闘技（ボクシング、総合格闘技など）	12.3	16.9	7.5
9	プロテニス	12.0	12.8	11.2
10	海外のプロバスケットボール（NBAなど）	11.8	16.2	7.3
	テレビやスマートフォンなどで観戦したスポーツはない	35.0	25.9	44.3

注）メディア：テレビ・スマートフォン・パソコン・タブレットなどによる視聴を含む

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

【表5-5】12～21歳のテレビやスマートフォンなどのメディアで観戦したスポーツの年次推移（学校期別：複数回答）

(%)

順位	種　目	中学校期			高校期			大学期			勤労者		
		2017 (n=541)	2019 (n=567)	2021 (n=505)	2017 (n=475)	2019 (n=508)	2021 (n=520)	2017 (n=362)	2019 (n=365)	2021 (n=399)	2017 (n=208)	2019 (n=194)	2021 (n=196)
1	プロ野球（NPB）	58.0	40.7	33.3	50.1	38.8	30.8	51.1	41.4	35.8	41.3	25.8	28.1
2	サッカー日本代表試合（五輪代表を含む）	43.1	32.3	22.6	39.8	30.1	22.9	39.0	32.1	22.8	31.3	19.1	12.2
3	高校野球	38.8	33.7	19.2	41.1	33.7	21.2	45.9	35.3	24.1	31.3	22.2	14.8
4	メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）	15.3	18.9	20.2	14.3	19.5	18.8	14.9	21.1	25.3	7.7	10.8	15.3
5	マラソン・駅伝	29.6	24.7	17.6	24.2	21.9	13.7	27.6	23.8	16.8	14.4	12.9	8.2
	テレビやスマートフォンなどで観戦したスポーツはない	14.0	25.6	33.1	16.2	25.0	34.6	18.0	24.4	32.1	24.0	44.3	46.4

注1）順位は2021年調査における全体の観戦率が高かった上位5種目
注2）2017年調査はテレビ観戦のみを対象としている
注3）回答選択肢（その他を除く）は、2017年調査23種目、2019年調査24種目、2021年調査24種目とした
注4）メディア：テレビ・スマートフォン・パソコン・タブレットなどによる視聴を含む

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

に着目し、学校期別にみた観戦率の年次推移を示した。2021年では、いずれの学校期においても「プロ野球(NPB)」が最も高く、中学校期33.3%、高校期30.8%、大学期35.8%、勤労者28.1%であった。2位は中学校期と高校期が「サッカー日本代表試合(五輪代表を含む)」であり、それぞれ22.6%、22.9%、大学期と勤労者は「メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)」であり、それぞれ25.3%、15.3%であった。

2017年からの推移をみると「サッカー日本代表試合(五輪代表を含む)」「高校野球」「マラソン・駅伝」はいずれの学校期においてもメディアによる観戦率は低下傾向にある。また「プロ野球(NPB)」は中学校期から大学期にかけては観戦率は低下の傾向を示している。「メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)」は中学校期と大学期、勤労者で観戦率は向上しており、近年における人気の高まりがうかがえる。

5-5 テレビやスマートフォンなどのメディアで観戦した映像や動画の内容

テレビやスマートフォンなどのメディアでスポーツを観戦した12~21歳を対象に、どのような映像や動画をみたのかを複数回答でたずねた。**表5-6**には、**表5-4**に示したメディアによる観戦率が高かった全体の上位5種目に着目し、映像や動画の内容ごとの割合を全体・性別に示した。

全体をみると「プロ野球(NPB)」「サッカー日本代表試合(五輪代表を含む)」「高校野球」「マラソン・駅伝」は「生中継の試合」の割合が最も高く、次いで「ニュースなどのスポーツコーナー」であった。「生中継の試合」は「マラソン・駅伝」76.2%が最も高く、「サッカー日本代表試合(五輪代表を含む)」63.8%、「プロ野球(NPB)」62.2%、「高校野球」60.8%の順であった。「メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)」は「ニュースなどのスポーツコーナー」65.2%が最も高く、次いで「生中継を除くウェブ上の動画」38.7%であった。

性別にみると、男子の「生中継の試合」は「マラソン・駅伝」が74.8%と最も高く、次いで「サッカー日本代表試合(五輪代表を含む)」69.7%、「プロ野球(NPB)」61.5%であった。女子は「マラソン・駅伝」77.8%が最も高く、次いで「高校野球」66.7%、「プロ野球(NPB)」63.3%であった。また、上位5種目のいずれも「生中継を除くウェブ上の動画」は女子に比べて男子の割合が高く、「ニュースなどのスポーツコーナー」は男子よりも女子の割合のほうが高かった。

【表5-6】12~21歳のテレビやスマートフォンなどのメディアで観戦した映像や動画の内容(全体・性別:複数回答)

(%)

順位	観戦した種目	全体					男子					女子				
		n	生中継の試合	試合の録画映像(DVDなど含む)	ニュースなどのスポーツコーナー	生中継を除くウェブ上の動画	n	生中継の試合	試合の録画映像(DVDなど含む)	ニュースなどのスポーツコーナー	生中継を除くウェブ上の動画	n	生中継の試合	試合の録画映像(DVDなど含む)	ニュースなどのスポーツコーナー	生中継を除くウェブ上の動画
1	プロ野球(NPB)	529	62.2	15.1	55.2	28.4	330	61.5	19.4	53.3	38.2	199	63.3	8.0	58.3	12.1
2	サッカー日本代表試合(五輪代表を含む)	348	63.8	13.2	40.8	25.6	234	69.7	15.0	37.2	33.8	114	51.8	9.6	48.2	8.8
3	高校野球	334	60.8	15.3	44.6	30.8	205	57.1	15.1	43.9	39.5	129	66.7	15.5	45.7	17.1
4	メジャーリーグ(アメリカ大リーグ)	336	24.7	17.6	65.2	38.7	248	29.0	19.4	58.9	48.4	88	12.5	12.5	83.0	11.4
5	マラソン・駅伝	244	76.2	4.9	34.8	10.7	127	74.8	3.9	33.1	15.0	117	77.8	6.0	36.8	6.0

注1) 順位は2021年調査における全体の観戦率が高かった上位5種目
注2) メディア:テレビ・スマートフォン・パソコン・タブレットなどによる視聴を含む

資料:笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2021

表5-7には学校期別にみたテレビやスマートフォンなどのメディアで観戦した映像や動画の内容を示した。「プロ野球（NPB）」における「生中継の試合」の割合は中学校期66.1%、高校期61.4%、大学期と勤労者が59.3%と学年進行にともなって減少する。一方「メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）」における「生中継を除くウェブ上の動画」の割合は中学校期28.3%、高校期39.8%、大学期44.0%、勤労者46.7%と学校期が上がるにつれて増加し、種目によって映像や動画の内容に違いがみられた。

【表5-7】12～21歳のテレビやスマートフォンなどのメディアで観戦した映像や動画の内容（学校期別：複数回答）

（%）

順位	観戦した種目	中学校期					高校期					大学期					勤労者				
		n	生中継の試合	試合の録画映像（DVDなど含む）	ニュースなどのスポーツコーナー	生中継を除くウェブ上の動画	n	生中継の試合	試合の録画映像（DVDなど含む）	ニュースなどのスポーツコーナー	生中継を除くウェブ上の動画	n	生中継の試合	試合の録画映像（DVDなど含む）	ニュースなどのスポーツコーナー	生中継を除くウェブ上の動画	n	生中継の試合	試合の録画映像（DVDなど含む）	ニュースなどのスポーツコーナー	生中継を除くウェブ上の動画
1	プロ野球（NPB）	165	66.1	15.8	60.0	23.6	158	61.4	13.9	53.2	25.9	140	59.3	18.6	56.4	35.0	54	59.3	7.4	42.6	25.9
2	サッカー日本代表試合（五輪代表を含む）	110	58.2	18.2	43.6	25.5	119	68.9	10.1	38.7	26.9	88	62.5	11.4	44.3	22.7	24	70.8	16.7	20.8	20.8
3	高校野球	92	64.1	9.8	48.9	23.9	110	56.4	16.4	40.9	33.6	95	61.1	21.1	48.4	32.6	27	70.4	7.4	33.3	29.6
4	メジャーリーグ（アメリカ大リーグ）	99	23.2	17.2	69.7	28.3	98	20.4	14.3	66.3	39.8	100	29.0	19.0	62.0	44.0	30	30.0	23.3	60.0	46.7
5	マラソン・駅伝	87	70.1	5.7	35.6	6.9	70	71.4	4.3	30.0	14.3	66	87.9	1.5	36.4	10.6	16	87.5	18.8	37.5	12.5

注1）順位は2021年調査における全体の観戦率が高かった上位5種目
注2）メディア：テレビ・スマートフォン・パソコン・タブレットなどによる視聴を含む
資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

COMMENTS

資料：笹川スポーツ財団「4～11歳のスポーツライフに関する調査」2021、「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2021

- 父親は仕事が早く終わった日、家の前で子どものバドミントンの練習につきあってくれます。また、YouTubeで有名選手のプレーを一緒にみたりします。〔13歳女子の母親〕
- YouTubeなどで配信されているダンスやエクササイズをみながら一緒に身体を動かしています。今年は受験やコロナで外出があまりできないので、家でできる簡単なトレーニングなどを取り入れるようにしています。〔17歳女子の母親〕
- 新型コロナウイルスの影響で、幼稚園の園庭開放が無くなったり公園に行けなかったりと、子どもが身体を思いきり動かせる場所が限られる中で家でできる運動をたくさんしました。私（母）のダイエットに付き合ってもらい、YouTubeをみながらダンスをしたり、町内をウォーキングしたりと2人で楽しめるように工夫しました。家の中ではあまり大きな動きはできませんが、これからもヨガマットなど使って体操したりしながら子どもと楽しみたいと思っています。〔5歳女子の母親〕
- YouTubeをみながら子どもと週2回筋トレと有酸素運動のダンスをしています。〔10歳男子の母親〕
- ルールの勉強を一緒にしたり、テレビの中継を解説してプレーについて何がいいのか悪かったのか考える機会を作ったりしている。〔11歳女子の母親〕
- 今はスポーツをするよりスポーツ観戦にはまっています。特に野球です。家族でテレビ観戦したり野球場に行ったりして観戦しています。〔18歳男子の母親〕